

新刊  
紹介

For some in ancient books delight;  
Others prefer what moderns write:  
Now I should be extremely loth  
Not to be thought expert in both.

アレグザンダー・ポープ作  
岩崎泰男訳

『髪 の 掠奪』

（同志社大学出版部、A5判  
五十五頁、一、〇〇〇円）

このたび本学の岩崎泰男教授が邦訳出版された『髪 の 掠奪』は私の知る限り本邦初訳であって、英語のタイトルを *The Rape of the Lock* といい、英国十八世紀前半を代表する大詩人ポープ (Alexander Pope, 1688-1744) の傑作である。

この詩は一七一一年ごろに英国の上流社

会におこった小さなスキヤンダルをもとにしたもの。一人の美女が大切にしていた巻き毛のひと房が、ある日やんちゃな青年貴族の手によって切断されてしまった。これをもとで彼女の家と貴族の家の間に不和が生じた。両家の和解をはかるためにポープが書いたのがこの詩である。

詩ではこの美女はペリンダという名で登場する。彼女は入念に化粧をこらした上で、お供をひきつれ、船でテムズ川をさかのぼってハンプトン・コート宮殿におもむく。そこで彼女は二人の青年貴族を相手にオンバーと呼ばれるトランプをやり、首尾よく勝利をおさめる。負けた方の貴族は以前から、この美女のうるわしい髪の毛を手に入れようと思って機会をねらっていたのであった。オンバーの勝利に酔いしれてコーヒーを飲んでいたペリンダの後から、彼は大ばさみでもって、髪の毛をばさりとつみとった。彼女は驚愕の叫びをあげる。髪の毛を返せ、といって彼女は貴族に迫るが、男はこれをがんとして拒絶する。そこで女性軍対男性軍の壮烈な戦闘が展開し、あわや女性軍の勝利かと思われたとき、髪の毛

は光を放ちつつ昇天し、夜空に一つの新星となって輝いたのである。

このたわいもない物語は、荘重な古典的叙事詩の文体で書かれている。取るにたらぬ内容をおごそかなスタイルで叙述することから生じる滑稽感に加えて、当時の読者の古典的教養をたえずすぐる工夫が、どこかされていて、この作品はこの種のジャンルのものでは最高の傑作とされている。

岩崎教授の訳は七五調文語体を基調とした明快な訳である。ペリンダの髪の毛の描写は

このおとめ、男の子誘<sup>おと</sup>ない破滅を招く、  
髪<sup>かみ</sup>のふたふさ養<sup>や</sup>えり、ともに波打ち  
優雅にたれて、輝く巻き毛と相ばかり、  
象牙のごとくつややかな、白き首<sup>くし</sup>を飾りたつ。  
(14頁)

となつている。どのような文体を選んだ訳出するかは、訳者の苦心の存するところであるが、岩崎訳は一種の戯作調を巧みに織りこむことによって効果をあげている。例えば「すでに色香もあせたのに、男さげすむいかず後家」(33頁)といったみごとに

一行に岩崎訳の面目を見ることがができる。  
大学院時代から一貫してポープ研究に打ち込んできた岩崎教授が、長年の研鑽をふまえた上で、このバイオニアリングな日本語訳を世に問われたことに對し、同僚・友人の一人として心からの拍手を送るものである。  
(北垣宗治・大学文学部教授)

森田 進著

## 『言葉と魂』

(ルガール社、B6判  
二〇三頁、六〇〇円)

本書は著者が今も傾倒しつづける五人の詩人についての詩論集であります。多くの詩人のなかから特にこれらの詩人が選ばれているのは著者がパトスを捧げてきた信仰と詩作との深く激しい関係によるものでもあります。山村暮鳥、八木重吉、大江満雄と並んでくるとすぐに一連のテーマを想い浮かべる人も多いことでありましょう。がしかし、次のような言葉によって結ばれる八木重吉論は決して通り一遍の信仰告白から

は生まれはしません。

——秀れたキリスト者詩人であり先輩である八木重吉には制限付きの尊敬は捧げますが、今日の私たちは、深い痛みをもって重吉を越えていかねばならないのです。(八木重吉論)

次いで大江満雄の前にして、

——戦後満雄は、私のなかにも／敵がいる。という短詩を書いた。満雄は弱者の居直りを拒否しつづけているのだ。この辛い誠実に、ぼくは打たれる。

このように自ら詩人である著者は、一つの言葉を洗い出して、詩人と読者との距離を取り払ってしまいます。

著者はキリスト者であるが故に引き受けなければならぬ苦難を数多く受けているのですが、同志社大学文学部に籍を置くようになっても形を変えて試練は待っています。なかでも芸術作品と向きあう時、宗教は抜き差し難く立ちふさがっていたのです。続いて、中原中也を論じるなかに、——この詩人は技巧よりも、己の魂の告白を重んじる、私の共感と不満とはまさしく、この一点にある。

という箇所があります。中、中也の怠惰に對して深い共感を抱きつつ、更に一步進んで倦怠の彼方に眼を注いでいるのは卓見です。

最後に登場するのは石原吉郎です。

——徹底的に人間の条件と剥奪された状況の中で、最後に剥奪されないものがあるとしたら、それは言葉であり、言葉であるところの精神である。(石原吉郎論)

甘ったるい詠嘆などで全然ない石原吉郎の語群のなかをつき通して、強い倫理性にもひるむことなく取り出してきた彼の基底が、ここに露出させられています。明快な論旨の展開が、一見捉えどころのない石原吉郎の詩に読者をしっかりと結びつけてまいります。このことは冒頭の山村暮鳥論において暮鳥のあやうさを指摘した強く、しかし優しい態度と共に著者の力量を示すものです。自らの信仰から、作品に匂う宗教性にのみ眼を奪われるという危険は大きいものですが、あくまでも一個の芸術作品としてつき放しているのは文学研究者としての著者の見識を示しています。このことによつてこそ作品の偉大さも詩人の宗教との

苛烈なせめぎあいも真に復元される、という事が証されるのであります。(H・M)

和田洋一編

## 『同志社の思想家たち』(下巻)

(同志社大学生協出版部)  
A5判、三五八頁、七九〇円

上巻とあわせ読んでみて、そこにひろがる世界の広さ、深さにいまさらながら驚いた。本書でとりあつかわれている人物は「徳富蘇峰」(執筆者・鶴見俊輔)、「小崎弘道」(土肥昭夫)、「大西 祝」(笠原芳光)、「徳富芦花」(和田洋一)、「中島重」(竹中正夫)、「留岡幸助・山室軍平」(小倉襄二)、「山本宣治」(望田幸男)の八人であるが、それぞれすぐれた個性の持ち主であるとともに、生きた世界もまた言論、教育、教会、文学、社会事業、政治とじつに多方面にひろがっている。かれらの思想もけっして一つではない。かれらにあらゆる共通性をみつけようとしても、なかなかみあたらない。

しかししいていえば、深窓に閉じこもることなく、時代の問題とがぶっり四つに組んで生きた、ということであろうか。右翼に暗殺された山本宣治、「無告ノ窮民」とともに生きた留岡幸助・山室軍平、社会的キリスト教運動に情熱をかたむけた中島重、いつも「無権の民のがわに」ついた芦花、そして教育勸諭論争をきっかけに国家批判を展開した大西 祝などの姿には、それがよくあらわれている。

本書でとりあげられたのは、すでにあるていど評価の定まった、けっして無名ではない人たちがかりであるが、「同志社」の特質をたしかめるためには、「思想家たち」という枠をはずしてみる必要があるのではないか。

巻末の鼎談「同志社の生んだ人間」(和田・鶴見・笠原)はその点の補いにもなっており、また本書の導入的な役割をも果たしている。

「ともかく同志社はいまもうすぐ百年ですかね。いま、誰かが天国へ行って、新島襄にインタビューをするとすれば、新島は、百年でちょうど切りがいいから、このへん

で同志社大学を廃止したらどうか、自分の創立した同志社が、こんな風になるとは思わなかった、というような気がするのです」(和田)。「ながく同志社に行っていないのでよくはわかりませんが、現在、機動隊導入後の同志社はまずいなと思っっている教職員は決して多くはないのじゃないかという気がしてしかたがないのですがね」(鶴見)。「それは敗戦後に戦争中のことと間違っていたとはそれほど思わなかったというのと同じです。機動隊導入というのは学生に対して、戦争をしなけることでしょう」(笠原)。

同志社はいま、どこを向いて歩いているのか。なにを教育し、どんな人物を輩出しようとしているのか、あるいは、いないのか。教育の混乱、理想の放棄、経営の困難など、非常に深刻な問題に直面している。その同志社がどうしても失ってはならないものはなんなのか。

本書は、これからの同志社を考える者にとって、なにがしかのヒントをあたえてくれる労作である。たんなる回顧のための本ではない。

(工藤弘志・大学宗教主事)